

館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期:令和4年2月5日(土)~7月10日(日)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。

収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生きた人々の暮らしについて展示・紹介します。明治・大正・昭和・平成・令和と時代が進むにつれ、私たちの生活様式も大きく変化してきました。そうした変化を、民具をとおして当時の生活を再発見していただく機会になればと考えております。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
1	すげがさ 菅笠		1	径52.0×高 12.5	主に雨具や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅(すげ)が栽培され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中(えっちゅう)福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗(むけいみんぞく)文化財に指定された	当館 (神保成伍氏)
2	カンカン ぼう 帽	大正中~昭 和初期	1	径20.6×高9.6	麦藁(むぎわら)帽子。麦藁をプレスして、糊(のり)やニスなどで塗(ぬ)り固めているため、軽くて丈夫(じょうぶ)である	当館 (富田保夫氏)
3	写真「着物姿でカンカン ぼう 帽を被る男性」(複写)	昭和初年頃	1	—	日本では男性の夏のフォーマルな帽子として広まった。叩くとカンカンと音がするため、カンカン帽ともいわれる	【昭】
4	モジリ (巻き袖)		1	身丈83.0×裾 60.0	女性用の仕事着。袖口(そでぐち)が細いため、仕事がしやすく、重ね着もできる	当館 (吉田元太郎氏)
5	そでな 袖無し		1	身丈63.0×裾 39.0	袖がない腰丈(こしたけ)ほどの短い上着。農作業時や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」ともよばれる	当館 (藤田よしえ氏)
6	もんぺ		1	丈80.0×腰回 94.0	女性の農作業用の野良着(のらぎ)。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
7	たらい 盥		1	径60.0×高 22.5	洗濯用の盥(たらい)。夏は盥でスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
8	洗濯板(せんたくいた)		1	幅55.0×奥行 55.0×厚1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸(おうとつ)の溝(みぞ)にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入(よめいり)道具の一つでもあった	当館 (谷道俊雄氏)
9	「着物の丸洗いの図」 (複写)		1	—	着物を丸洗いする場合の手順を示したものの	【い】
10	写真「洗(あら)はりいた かわ かす」(複写)	昭和51年 (1976)	1	—	シワにならないように乾かすことができる	【昭】
11	写真「盥と洗濯板で揉み あら 洗い」(複写)	昭和30年代 以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸(つ)けて、しゃがんで洗濯板を使い、石鹼(せっけん)をこすりつけながら揉(も)み洗いする	【昭】
12	たけかわぞうり 竹皮草履		2	幅12.0×奥行 22.5	一足。竹の皮を編(あ)んだ底の部分に鼻緒(はなお)が付けられた草履(ぞうり)。底が半分ほどの長さしかない「足半(あしなか)草履」もある	当館 (富田保夫氏)

13	わらながべつ 藁長靴		2	幅10.9×奥行 25.0×高34.0	一足。雪の中で履く藁製(わらせい)の長靴。底が草鞋(ぞうり)になっていて、取り外しができる。爪先(つまさき)部分が割れており、履(は)いてから縄(なわ)で縛(しば)るため、隙間(すきま)から雪が入らないようになっている	当館
14	げた 男物用下駄		2	幅10.7×奥行 23.0×高10.0	雨天や雪道の歩行に履いた。歯は減ったら差し替えることのできる「差歯下駄」である	当館 (西田弘氏)
15	たかあしだ 女物用高足駄	昭和40年 (1965)頃	2	幅22.5×奥行 10.0×高11.5	雨天時や雪道の歩行に履いた。爪先(つまさき)に覆(おおい)いを付けた「爪掛(つまがけ)」は、保温のためと爪先が濡(ぬ)れるのを防ぐためのもの。「足駄(あしだ)〔高下駄(たかげた)〕」は、差し替える底の歯が高く作られている。未使用品	当館 (山田館夫氏)
16	そうげ 箆筒		1	幅52.0×奥行 45.0×高21.0	北陸や西南日本での箆(ざる)の地域名。野菜を洗ったり、研(と)いだ米の水を切る。食材などを干すのにも使う	当館 (田中為雄氏)
17	きへえさく てつびん 金森佐兵衛作《鉄瓶》		1	径10.0×高 19.5	湯を沸(わ)かしたり注(そそ)いだりする道具。金屋町の鑄物(いもの)職人・金森佐兵衛の作。高岡銅器(どうき)(鑄物)の歴史は、高岡開(かい)町(ちょう)(1609年)間もなく、前田利長(まへだとしなが)が、現高岡市戸出(といで)西部金屋(にしぶかなや)から7人の鑄物師(いもじ)(鑄造(ちゆうぞう)技術者)を呼び寄せたことに始まると伝わる。金森家もその流れをくむ家系で、特に4代佐兵衛(1847～98)は、「金寿堂」を屋号(やごう)として用いた鉄瓶(てつびん)の名手(めいしゅ)だった。	当館
18	てつなべ 鉄鍋		1	径30.4×高 17.2	囲炉裏(いろり)や竈(かまど)に掛けて、汁物や煮物などを煮炊(に)きた。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮る	当館
19	てつせいほがま 鉄製羽釜		1	径43.0×高 33.0	ご飯を炊(た)く鉄(てつ)製の釜(かま)。竈(かまど)にかけるための鏝(つば)を羽に例えて「羽釜(はがま)」という。鉄の鍋(なべ)釜(かま)は、高岡開(かい)町(ちょう)(1609年)以来の金屋(かなや)町の特産品だった	当館 (筏井晴夫氏)
20	アルミ製羽釜	昭和20年代 以降	1	径32.0×高 19.7	アルミ製の釜。高岡市街は、戦争で米空軍(べいこうぐん)の空襲(くうしゅう)の被害を免(まぬ)かれた。兵役(へいえき)を終えた鑄物(いもの)業者は銅器(どうき)生産の設備を利用し、軍需物資(ぐんじゆぶつし)ではなくなったアルミニウムで生活用品(鍋・釜)を大量に生産した。戦後の物資不足で、アルミ製の鍋や釜は多く売れたという	当館
21	とうせいほがま 陶製釜	昭和14～20 年(1939～ 45)頃	1	径21.8×高 15.0	戦時中の金属(きんぞく)代用品(だいようひん)。戦時中の「金属供出令(きんぞくきょうしゅつれい)」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された	当館 (五嶋孝一氏)
22	写真(かまど)に掛(か)けられた羽釜(はがま)と自在鉤(じざいかぎ)に下げられた鉄瓶(てつびん) (複写)	昭和34年 (1959年)頃	1	—	竈(かまど)に羽釜(はがま)が掛(か)けられ、その隣(となり)に自在鉤(じざいかぎ)に下げられた鉄瓶(てつびん)がある。竈(かまど)の焚口(たきぐち)の前には火箸(ひばし)がある。写真奥の薪(まき)を燃やしている	【台】
23	とうしばじどうしきでんきがま 東芝自動式電気釜	昭和30年 (1955)	1	径33.3×高 25.3	国産第1号の電気釜(炊飯器)。東芝(とうし)製(発明は協力会社の光伸社)製。主婦の家事労働(かじろうどう)時間を大幅(おおは)に減(へ)らし、生活様式に大きな変化をもたらした	当館 (有澤康夫氏)

24	お櫃		1	径31.6×高23.4	炊(た)きあがったご飯を釜(かま)から移(うつ)し入れて保存(ほぞん)しておくための道具。冠婚葬祭(かんこんそうさい)用のものに漆塗(うるしぬり)のものもある。夏は炊いたご飯が腐(くさ)りやすいので木製のお櫃(ひつ)は使用せず、竹製のものに入れておいた。冬は、稲藁(いなわら)で作った蓋付の入れ物に飯櫃(めしびつ)を入れて保温した	当館
25	しゃもじ立て		1	径6.3×高59.7	しゃもじ立ては、竹の節(ふし)を用いて筒を連ねたように作ったもの。台所の脇(わき)に掛(か)けておいて、しゃもじ・はんがい・箸(はし)などを挿(さ)しておくのに使われた	当館 (徳田三郎氏)
26	箱膳		1	幅31.0×奥行31.0×高17.0	一人用のご膳(げん)。箱の中に茶碗(ちやわん)・箸(はし)・皿などを入れておき、食事の時に蓋(ふた)をあおむけて置(お)き、上に茶碗を並べてご飯を食べる。食事後は中へ食器をしまっておく	当館
27	写真「箱膳で食事をする家族」(複写)	昭和32年(1957)頃	1	—	各々(おのおの)が箱膳で食事をとる風景	【台】
28	通い德利(高岡通町(とおりまち)・富田醤油(しょうゆ)店)	明治末～昭和初期	1	幅14.5×高26.0	酒屋(さかや)や醤油店(しょうゆてん)が貸(か)し出す德利(どっくり)。客はこれを店に持っていく、必要なだけの量の酒や醤油を購入(こうにゆう)した。代金はつけ(後)払(ばら)いで、お盆(ぼん)と年末にまとめて支払った。貸德利(かしどっくり)、貧乏(びんぼう)德利ともよばれる	当館
29	じざいてしよく自在手燭		1	幅19.8×奥行10.1×高13.2	蠟燭(ろうそく)を立てて持ち運(はこ)ぶ移動用(いどうよう)の燭台(しよくだい)。垂直(すいちよく)に立てて鴨居(かもい)・長押(ながし)などに引つ掛(か)ける「掛燭(かけしよく)」にもなる	当館
30	ありあけあんどん有明行灯		1	幅26.0×奥行26.0×高35.0	部屋の照明(しょうめい)道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸(めんし)や藺草(いぐさ)などで作った灯芯(とうしん)を入れて点火(てんか)した。夜明けまで常夜灯(じょうやとう)として使用されたので、「有明行灯(ありあけあんどん)」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
31	いえちようちん家提灯	昭和期	1	径44.6×高75.0	中に蠟燭(ろうそく)を入れて明かりをとる道具。日(ひ)の丸(まる)の紋(もん)が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)
32	かくとう角灯		1	幅9.2×奥行9.2×高20.5	室内用照明器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用。電灯(でんとう)が普及(ふきゆう)したあとも、停電時(ていでんじ)や懐中電灯(かいちゆうでんとう)が普及するまで使われた	当館 (泉治夫氏)
33	カーバイドランプ	大正～昭和前期	1	径14.0cm×高28.3	カーバイド(炭化(たんか)カルシウム)に水を加えると発生するアセチレンガスを燃料(ねんりょう)として使用するランプ。火力が強く、燃料の持ち運びにも便利であった	当館 (徳田三郎氏)
34	れんたん練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4×高25.6	練炭(れんたん)を中に入れて使用する。風で消えることなく長時間燃えるため、屋外(おくがい)での煮炊(にた)きや暖(だん)をとる時に使う	当館
35	ひぼち火鉢		1	径44.6×高29.2	灰を入れて炭火(すみび)をおこし、手足を温めたり、湯(ゆ)を沸(わ)かしたりする暖房具(だんぼうぐ)。石油(せきゆ)ストーブが登場(とうじょう)して以降(いこう)、衰退(すいたい)していった	当館 (菊田明美氏)

36	ブリキ製湯たんぼ	大正～昭和初期	1	幅32.0×奥行24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床(ねどこ)で使う道具。湯が冷めないように、注水口(ちゅうすいこう)をできるだけ小さく作り、栓(せん)をして使う	当館 (織田睦夫氏)
37	とうせい 陶製湯たんぼ	昭和戦中	1	幅22.9×奥行15.2×高9.4	中にお湯を入れて、手足や体を温めるための道具。やけどしないように布に巻いて、布団の中に入れて使った。「国策湯丹保(こくさくゆたんぼ)」とあり、戦時中の金属代用品である	当館
38	雪ばんば	明治～大正期	1	幅19.5×高129.0	除雪(じよせつ)用道具。雪を掘(ほ)って掻(か)き退(の)けたり、屋根の雪下ろしなどに用いた。幕末(ばくまつ)から明治期の高岡市伏木(ふしき)を代表する廻船問屋(かいせんどんや)の一つ・八坂(やさか)家(車屋(くるまや))に伝わったもので、表と裏3ヶ所に商標(しょうひょう)の焼印(やきいん)「ヤママル」がみられる	当館 (今井昭次氏)
39	写真「置炬燵(おきごたつ)の図」(複写)		1	—	炬燵檣(こたつやぐら)とよばれる木枠の中心に、行火(あんか)または掘(ほ)り炬燵(ごたつ)を置き、上から炬燵布団(こたつぶとん)をかけて使われた	
40	こたつやぐら 炬燵檣		1	幅50.5×奥行50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火(あんか)などをおき、布団の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)
41	ねごたつ(行火) (あんか)		1	幅・奥行・高各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。これを覆(おお)うように檣(やぐら)をのせ、その上に布団をかぶせて暖(だん)をとった	当館 (江渕安太郎氏)
42	おみと 炭取り	明治期	1	径24.5×高32.3	炬燵や火鉢に使う炭を、炭俵(すみだわら)から小出しにして持ち運んだり、入れておくためのもの。竹製	当館 (藤井喜代乃氏)
43	こて 鏝		1	幅4.5×高37.8	炭火などの中にコテ部を差し込んで熱(ねつ)したものを、着物などの縫(ぬい)目に当て、縫ったところを伸(の)ばしたり、折(お)り目をつけたりする道具。「焼きごて」ともいわれる	当館 (神保成伍氏)
44	ひ 火のし		1	径11.7×長37.7×高5.4	底の滑(なめ)らかな金属製の鍋の中に炭火を入れ、その熱を利用して底を布に当ててシワをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)
45	すみび 炭火アイロン		1	幅21.0×奥行10.6×高19.7	アイロンの本体に火の付いた炭(すみ)を入れ、その熱で布のシワを伸ばした。上部には、煙(けむり)を逃(に)がし、空気を取り込むための煙突(えんとつ)が付いている	当館 (室崎信一氏)
46	ナショナル スーパーアイロン	昭和2年(1927)発売	1	幅17.5cm×奥行14.6×高11.9	松下電器製作所(現・パナソニック)が発売した電気アイロン。電気アイロンは、明治33年頃に登場し、各家庭に普及(ふきゅう)し始めたのは大正6年頃であるとされる	当館
47	はえと 蠅取り器		1	最大径17.8cm×最小口径3.4cm×高14.3cm	容器の中に水などを入れ、下に紙を敷(し)き、飯粒(めしつぶ)や砂糖(さとう)を置(お)くと下部から蠅(はえ)が入り水に落ちる仕組み。ガラス製	当館
48	せいた 背板		1	幅47.0×奥行77.0	荷物を担(かつ)ぐために背負(せお)う運搬(うんぱん)道具。稲(いね)や薪(まき)など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
49	にないぼう 荷棒(背板用)		1	長71.5	疲(つか)れたときなど、荷物を背負(せお)ったまま荷棒(にないぼう)を背板(せいた)の下において支(さ)えて休むことができる	

50	写真絵葉書「背板 ^{うまや} で馬屋 ^{ごえ} 肥を運ぶ女性たち」(複写)	昭和8～19年(1933～44)頃発行	1	—	馬屋肥 ^(うまやごえ) とは、家畜 ^(かちく) の糞尿 ^(ふん) に ^{よう} や敷 ^(し) き藁 ^(わら) などを腐 ^(くさ) らせて作る肥料 ^(ひりょう) のこと。庄川 ^(しょうがわ) (富山県西部)の近辺の農村にて	当館
51	まんが馬鍬		1	幅90.3×奥行8.0×高70.0	馬や牛に曳 ^(ひ) かせて代 ^(しろ) かき(田植えのため、田に水を入れて土を砕 ^(くだ) いて掻 ^(か) きならす作業)をする道具	当館 (中山武央氏)
52	「牛に馬鍬 ^{まんが} を曳 ^ひ かせる図」(複写)	大正期	1	—	一人が牛に繫 ^(つな) がれた馬鍬 ^(まんが) を支 ^(さ) え、もう一人が牛の綱 ^(つな) を曳 ^(ひ) いている図	【い】
53	しんぼん かなざわ どうちゅう 「新板 金沢 道中 すごろく 双六」	安政4年(1857)頃	1	44.9×65.0	江戸 ^(えど) 日本橋 ^(にほんぼし) を振 ^(ふ) り出しにして、金沢 ^(かなざわ) を上がりとする道中双六 ^(どうちゅうすごろく) 。計64の宿場 ^(しゆくば) (コマ)が描かれ、高岡では特産の鋳物 ^(いもの) 〔輪灯 ^(りんとう) (吊 ^(つ) り灯明 ^(とうみょう))という仏具 ^(ぶつぐ) と矢立 ^(やたて) (携帯用 ^(けいたいよう) 筆記 ^(ひっき) 用具)〕が描かれる。画は歌川国芳 ^(くによし) の門人 ^(もんじん) で、幕末 ^(ぼくまつ) ・明治期に活躍 ^(かつやく) した浮世絵師 ^(うきよえし) ・歌川芳員 ^(よしかず) (生没年不詳 ^(せいぼつねんふしょう))	当館
54	ちよきんすごろく たかおかちよきん 「貯金双六」(高岡貯金 ぎんこう 銀行)	明治28年(1895)	1	45.5×60.5	明治28年(1895)10月、高岡源平板屋 ^(げんべいいたや) 町に設立された高岡貯金 ^(ちよきん) 銀行(1922年高岡商業銀行と改称 ^(かいしょう))、1939年高岡銀行に合併 ^(がっぺい) 、のちに北陸 ^(ほくりく) 銀行となる)の宣伝 ^(せんでん) 用双六 ^(すごろく) 。「越岡高吉」が新聞配達 ^(しんぶんはいたつ) をしていた少年時代から貯金を重ねて機織場 ^(はたおりば) を設立し、ついには県下一の多額 ^(たがく) 税 ^(ぜい) 者 ^(しや) となって貴族院 ^(きぞくいん) 議員 ^(ぎいん) になるまでの出世 ^(しゅっせ) 双六	当館
55	たかおか はんじようすごろく 「高岡 繁昌 双六」	明治33年(1900)	1	62.4×78.4	明治33年(1900)元旦の『北陸中央新聞 ^(ほくりくちゅうおうしんぶん) 』附録 ^(ふろく) の双六 ^(すごろく) 。この双六には、当時高岡で話題 ^(わだい) となった出来事や、名所 ^(めいしよ) ・人物・施設 ^(しせつ) などの様子がイラストを交えて賑 ^(にぎ) やかに描かれる。同年6月の高岡大火 ^(たいか) 前の様子がわかる貴重 ^(きちょう) な資料 ^(しりょう) でもある	当館
56	しんあん たかおか しょうてん 「新案 高岡 商店 すごろく 双六」	大正期	1	54.5×79.0	高岡の商店の宣伝 ^(せんでん) を兼 ^(か) ねた双六 ^(すごろく) 。小馬出 ^(こんまだし) 町の梅田呉服 ^(ごふく) 店を振 ^(ふ) り出し、横田町の酒屋・三谷長八郎を上がりとして、計21の商店についてイラスト入りで紹介 ^(しょうかい) されている	当館
57	しょうばい はんえい すごろく 「商売 繁栄 双六」	昭和7年(1932)	1	54.5×79.3	昭和7年(1932)元旦の『高岡新聞 ^(たかおかしんぶん) 』(同6年に『高岡新報 ^(しんぼう) 』より改題 ^(かいだい))附録 ^(ふろく) の双六 ^(すごろく) 。振 ^(ふ) り出しの「渡辺 ^(わたなべ) 自動車」と上がりの「高岡新聞社」を含 ^(ふく) む、合計36の市内商店が掲載 ^(けいさい) されている	当館

58	ねんちゅう ぎょうじすごろく 「年中 行事双六」 (射 みかんじや 水神社)	昭和後期	1	51.5×75.5	1年間の年中行事について、子ども向けに分かりやすいイラストが刷(す)られた双六(すごろく)。「初詣(はつもうで)」から、「歳(とし)の市(いち)」(年末(ねんまつ)に立つ、正月用の飾(かざり)物(もの)や雑貨等(ざっかなど)を販売(はんばい)する市(いち))など、合計21の行事が描かれる(原画(げんが)・平澤(ひらさわ)定人(さだと))。発行・勸神道文化会、製作・懶雄進社	当館
59	おおあたりしよげいさかえすご 「大当利諸芸栄 寿語 双六」	明治17年 (1884)	1	48.9×72.0	楊州(ようしゅう)周延(ちかのぶ)画、出版・綱島(つなしま)亀吉(かめきち)。様々な諸芸術(しよげいじゆつ)が色鮮(あざ)やかに描かれた双六(すごろく)。振(ふ)り出しの「おどり(踊り)」から、上(う)がりの「人形芝居(にんぎやい)」まで、獅子舞(ししまい)や浄瑠璃(じようるり)、綱渡(つなわた)りなどを含めた計20の諸芸(しよげい)がみられる。楊州周延(1838～1912)は現・新潟(にいがた)県出身の浮世絵師(うきよえし)。本名は橋本(はしもと)直義(なおよし)。役者をはじめ、江戸時代の風俗(ふうぞく)や西南(せいなん)戦争などを主題(しゆだい)に幅(はば)広い作品を手がけた	当館 (吉野弘人氏)
60	となみぐんすもうばんづけ 砺波郡相撲番付	明治18年 (1885)10月	1	49.5×34.6	石丸神社で開催(かいさい)された地方(草)相撲(ずもう)の番付(ばんづけ)。10月26日から3日間の日程で行われた。旧(きゅう)砺波(となみ)郡(ぐん)に現在「石丸神社」と称(しょう)する神社は無いが、砺波市東石の「東石丸神社」又は同市石丸の「神明社(しんめいしゃ)」かと考えられる	当館
61	となみぐんすもうばんづけ 砺波郡相撲番付	明治19年 (1886)4月	1	47.8×34.5	中田(なかた)神社で開催(かいさい)された地方(草)相撲(ずもう)の番付(ばんづけ)。旧(きゅう)砺波(となみ)郡(ぐん)に現在「中田神社」と称(しょう)する神社は無いが、高岡市中田で最も大きい移田(いかた)八幡宮(はちまんぐう)のことと思われる。江戸後期から昭和30年代まで県内各地、特に砺波郡で盛(さか)んに草相撲(くさずもう)が開催された	当館
62	となみぐんすもうばんづけ 砺波郡相撲番付	明治20年 (1887)8月	1	50.6×36.0	現(げん)砺波(となみ)市中央町の真如院で開催(かいさい)された地方(草)相撲(ずもう)の番付(ばんづけ)。左側4段(だん)目の右端(はし)に「二ツ瀧力蔵」、6番目に「二本松久吉」とある。両名は、高岡市二上(ふたがみ)谷内(やち)(二上射水神社前)にある明治8年(1875)建立(こんりゅう)の石碑(せきひ)に名があり、共に高岡の上(かみ)二上(ふたがみ)出身(しゅっしん)	当館
63	とうきよ ずもうばんづけ 東京 相撲番付	明治44年 (1911)5月	1	62.3×47.1	本展(ほんてん)初公開(はつこうかい)資料。明治44年(1911)5月15日より、東京・両国(りょうごく)国技館(こくぎかん)で行われた相撲(ずもう)の番付(ばんづけ)。越中(えつちゅう) (現富山県)出身力士は、西の横綱(よこづな)に梅ヶ谷(うめがたに)と太刀山(たちやま)、前頭(まえがしら)一枚目に玉椿(たまつばき)、同三枚目に黒瀬川(くろせがわ)、同四枚目に緑鷺(みどりしま)などが名を連ねている	当館 (神初豊一氏)

64	げんべい むしやくらべ 「源平 武者競」	江戸後期	1	22.3×16.5	本展(ほんてん)初公開(はつこうかい)資料。源氏(げんじ)を鎌倉方(かまくらがた) (大関・右大将(うだいしょう)頼朝(よりとも))、平氏(へいし)を京都方(きょうと) (小松(こまつ)内府(ないふ)重盛(しげもり)) とに分けて番付(ばんづけ)のように並べ、格付(かくづけ)した見立番付(みたちばんづけ)。鎌倉方には、伊予(いよ)守(かみ)(源(みなもと)義経(よしつね)や朝日(あさひ)将軍(しょうぐん)源(みなもと)義仲(よしなか)、巴(ともえ)御前(ごぜん)などの名が見られ、行司(ぎょうじ)の一人に義経家臣(よしつねかしん)・武蔵坊(むさしぼう)弁慶(べんけい)がいる	当館
65	かえつこのうこじんこうみょう 「加越能(かえつ)古人(こじん)高名(こうみょう)一覽(いちらん)」	明治27年(1894)10月	1	51.5×36.2	加越能(かえつ) (加賀(かが)・越中(えちゅう)・能登(のと))の著名(ちよめい)人を連(つら)ねた番付(ばんづけ)表。美術(びじゆつ)・学術(がくじゆつ)・文芸(ぶんげい)等の各分野(ぶんや)で活躍(かつやく)した人物(じんぶつ)が挙(あ)げられる。高岡(たかおか)関係(かんけい)では、宇津(うづ) (多(おほ))国宗(くにむね)・古入道(ふるいりだう)国光(くにみつ) (宇多派(うたは)の刀工(とうこう))、漆工(しっこう)の砺波屋(らいなみや)藤(とう) (桃(とう))藏(ぞう) (造(ぞう))、高岡(たかおか) (石井(いしゐ) 勇助(ゆうすけ)、板屋(いたや)小右衛門(こえもん)、彫金(ちようきん)の安川(やすかわ)錦(きん) (乾(けん))清(せい)・安川(やすかわ)三右衛門(さんえもん)、侠客(きやうかく)大長(だいちよう) (蓮花寺屋(れんげじや)伝右衛門(でんえもん))などがみられる	当館
66	だいにほんろうじゆばんづけ 「大日本(だい)老樹(ろうじゆ)番付(ばんづけ)」	大正2年(1913)	1	78.8×54.7	老樹(ろうじゆ)名木(めいぼく)の擁護(ようご)を広く呼びかけるため、東(とう) (濶(かっ) (広(こう)) 葉樹(ようじゆ))、西(せい) (針葉樹(しんようじゆ))に分けて番付(ばんづけ)のように並べ、格付(かくづけ)した番付表(ばんづけひょう)。高岡(たかおか)市では、西(せい)の国内(こく内)最高位(さいこうゐ)・関脇(せきわけ)に末広(すえひろ)町(まち)にあった七本杉(しちほんすぎ) (昭和2年(しょうわに)伐採(ぼくさい))のほか、福岡(ふくおか)町(まち)赤丸(あかまる)浅井(あさゐ)神社(じんじゃ)の勅使桜(ちよくしぎくら)が挙(あ)げられている。富山(とやま)県内(けん内)では本市(ほんし)を含め、10の老樹(ろうじゆ)名木(めいぼく)が番付(ばんづけ)に名(な)を連(つら)ねている	当館 (望月(もちづき)保氏(たけ))
67	しちほんすぎ すがた 写真(し)「七本杉(しちほんすぎ)最後(す)の姿(すがた)」	昭和2年(1927)	1	—	高岡(たかおか)市(し)末広(すえひろ)町(まち)にある七本杉(しちほんすぎ)の伐採(ぼくさい)前(まへ)に行われた式典(しきてん)で撮影(さつえい)された写真(し)	高岡市
68	だいにほんはいゆう おおみたて 「大日本(だい)俳優(はいゆう)大見立(おおみたて)」	大正2年(1913)	1	51.8×72.6	多くの俳優(はいゆう)を相撲(すもう)番付(ばんづけ)のように、横綱(よこづな)・関脇(せきわけ)・小結(こむすび)などの項目(こうもく)で並べ、格付(かくづけ)した見立(みたち)番付(ばんづけ)の一種(いっしゆ)	当館 (吉野(よしの)弘人(ひろひと)氏)

※所蔵先の写真の出典は、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)、【い】『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』(柏書房, 2004年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

計 68件72点